

# 横浜

Yokohama Renaissance

# ルネサンス



Number 11

特集

## 横浜を読む

横浜の定番

## 勝烈庵のカツレツ

Who's Who in YOKOHAMA

## 丸山和俊さん

O H A M A



横浜信用金庫

横浜信用金庫

## A Table of Contents

### ごあいさつ

横浜信用金庫理事長  
齋藤 寿臣

『横浜ルネサンス』第11号をお届けします。『横浜ルネサンス』は、当金庫の創立80周年記念事業の一環として、2002年10月に創刊しました。当初は年1回の発行でしたが、2006年から春と秋の年2回発行としています。

本号では、特集「横浜を読む」と題して、書物に限らず、地図や建築物なども含めて横浜を多面的に読み込むことを試みました。『横浜ルネサンス』は元々、「都市は書物である」というテーマを受けて、生活者の視点による「横浜の読み方」を提示することをコンセプトとしています。本号の特集は、その意味で創刊時の精神にもっとも忠実なものと言えるかもしれません。

5回目となる「横浜の定番」では、創業1927年(昭2)という老舗、勝烈庵さんのカツレツを取り上げました。前号の崎陽軒さんのシウマイに続き、おいしい企画になりました。WHO's WHO in YOKOHAMAでも味に関わる記事として、明治時代の味を復刻した「清水屋ケチャップ」で話題の株式会社インターフードさんにご登場いただきました。

20頁では、2008年1月から2月にかけて、キング(横浜県庁本庁舎)、クイーン(横浜税関)、ジャック(横浜市開港記念会館)の横浜三塔について、「最も訪れてみたい塔」を全国から募った集計結果をご紹介します。

第4回となる「横浜の聴き方」では、浅川マキの「夜が明けたら」を素材に浜っ子の気質・プライドについて述べています。

『横浜ルネサンス』第11号、お楽しみいただければ幸いです。

表紙撮影：矢部志保

横浜絵解き図絵／輸入食品の違反事例…………… 2  
目次／理事長挨拶…………… 3

### 特集 横浜を読む



山崎洋子 小説家  
開港期の横浜を読み解く絶好の書  
「赤い崖の女」…………… 4



石黒徹・入江佳久 横浜市まちづくり調整局  
街の変遷を解説可能にした  
“まちづくり地図情報”…………… 6



兼弘 彰 一級建築士  
洋館付き住宅から横浜の  
都市デザインを発想する…………… 8



河野 真 古書店通販販売サイト・オーナー  
古書店サイトから  
文化発信サイトへの大転換…………… 10



佐々木 淳 有隣堂出版部  
地元老舗書店の出版部だからこ  
だわる人・地域に根ざした出版  
活動…………… 12

横浜を詠む  
横浜の定番

水原紫苑 写真：矢部志保…………… 14  
勝烈庵のカツレツ…………… 16

### Who's Who in YOKOHAMA



丸山和俊 インターフード社長…………… 18  
コーヒー鑑定士修行で磨いた  
色と香りと味の評価軸

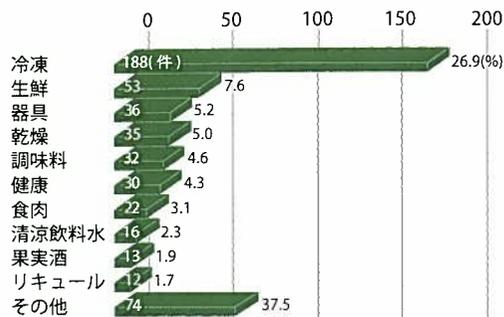
横浜三塔物語…………… 20

あなたが選ぶ、お気に入りの一塔  
「最も訪れてみたい塔は？」結果発表

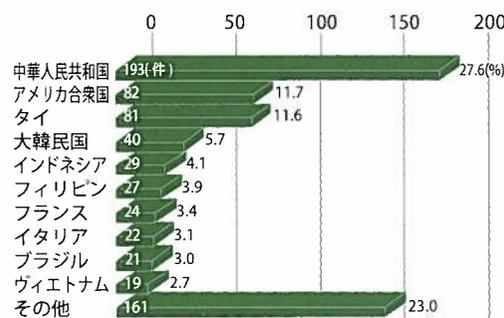
横浜の聴き方4「夜が明けたら」中島久…………… 22  
横浜ジェリービーンズ倶楽部通信…………… 23

### ◎横浜絵解き図絵

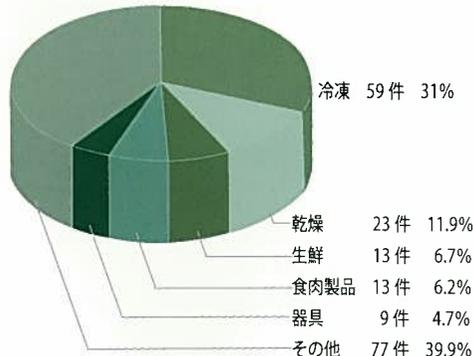
#### 輸入食品の品目別違法事例件数 ワースト10



#### 輸入食品の国別違法事例件数 ワースト10



#### 中国の品目別違反事例件数 ワースト10



厚生労働省「輸入届けにおける代表的な食品衛生法違反事例より作成

### 輸入食品の違反事例

横浜税関が3月27日に発表した2月の横浜港貿易速報によると、中国からの食料品輸入額は約62億1900万円でした。これを、前年同月比で見ると17.4%ダウン。中国の旧正月や円高に加え、中国製ギョーザ中毒事件が影響している気配です。

現在、私たちが毎日口にする食品の61%(カロリーベース)を輸入に頼っています。そんな中でいったい食の安全はどの程度確保されているのか、厚生労働省の「輸入食品監視業務ホームページ」を開き「輸入届けにおける代表的な食品衛生法違反事例 ([http://www1.mhlw.go.jp/topics/ysk\\_13/tp0419-1q.html](http://www1.mhlw.go.jp/topics/ysk_13/tp0419-1q.html))」を調べてみました。

同ページに掲載された代表事例は699件。品目別の違反事例のワースト10は、冷凍食品188件、生鮮食品53件、食器など器具36件、乾燥食品35件、調味料32件、健康食品30件、食肉製品22件、清涼飲料水16件、果実酒13件、リキュール12件です。以上で、全体の62.5%を占めています。

国別で見ると、ワースト5は、中華人民共和国193件、アメリカ合衆国82件、タイ81件、大韓民国40件、インドネシア29件です。この5カ国で60.8%を占めています。

これを、中華人民共和国にしぼって見てみると、同国の違反品目ワースト5は、冷凍食品59件、乾燥食品23件、生鮮食品13件、食肉製品13件、食器など器具9件の順になります。これらの違反で同国の違反事例の60.1%を占めています。

ちなみに、第2位のアメリカ合衆国以下の国々の品目別の違反事例のトップを見ると、アメリカのワーストNo.1は健康食品の17件。以下、タイ=冷凍食品43件、大韓民国=冷凍食品12件、インドネシア=冷凍食品12件の順。

冷凍食品を購入する場合は原産地国表示をよく確かめてから購入するようするなど、自己防衛策が必要なようです。

# 開港期の横浜を読み解く 絶好の書『赤い崖の女』

やまざき ようこ  
1947年 京都府生まれ。コピーライター、児童読物作家、脚本家などを経て、小説『花園の迷宮』で第32回江戸川乱歩賞を受賞して作家デビュー。代表作『熱月』『炎精』『天使はブルースを歌う』『伝説』になった女たち。舞台の脚本・演出も手がける。横浜在住。http://home9.highway.ne.jp/FUYUMOMO/



Photo: shiho

## 横浜を描き抜いた最新の代表作

昨年11月に上梓された山崎洋子さんの最新作『横浜開港絵巻 赤い崖の女』（横浜開港150年記念企画 講談社）は、実に巧みな横浜歴史ガイド小説だ。

横浜を描いた山崎洋子さんの作品は数多いが、時代物としては、「花園の迷宮」（昭和初期）「横浜秘色歌留多」（大正）、「横浜幻燈館」（明治三十年代）、ときどき、ついに開港期の登場である。

時代は今から150年前、幕末から明治へ変わるうとしていた激動の時代。本牧の漁村に生まれたヒロイン・希沙は、後妻に溺れた父親、血のつながらない姉との確執の果てに、横浜の遊廓へと売られていく。だが、開港場・横浜を一新させた豚屋火事により、遊廓を出ることになった。清国人の買弁に助けられ、いったんは神戸に移るが、火事で別れ別れになった親友を捜すため、また横浜に戻ってくる。そこで希沙を待ち構えていたのは、思ひ掛けない再会と事件だった……。

読み進むうちに、あたかもタイムマシンで運ばれたかのように、当時の横浜の風景や人々のたずまいが浮かぶ。そして、なるほどあそこはそういう場所だったのかと、合点がいくことになる。

開港という大きな時代のうねりに翻弄され

るヒロインを軸に、激動する横浜の歴史を活写するこの本は、横浜通になるためのガイドブックでもあるのだ。

## 浮かび上がってくるあの頃の横浜

小説執筆の前に、山崎さんは横浜の歴史本や文献を集め、図書館にも何度も通うなど、徹底的に資料調べを行ったという。

「おかげで図書館の方とはすっかり顔なじみになり、いろいろ手伝っていただきました」。

その資料のひとつが「集大成 横浜浮世絵」（有隣堂。横浜遊郭で男たちを誘う絢爛華麗な花魁たちの艶やかな姿が描かれており、「赤い崖の女」の表紙の絵も、この本の中から選んだ。

こうした綿密な資料調べの結果、浮かび上がってきたのは、150年という決して長くはない歴史の上に、重層的に積み重なっている横浜のさまざまな表情だった。

単なる一漁村だった横浜村に、文明開化とともに国内外から多くの人々が集まり、外国商館が建ち並んだが、一転豚屋火事で焦土と化し、そこからまた逞しく復興を遂げ、さらに大震災で壊滅的な打撃を被る。そんな激しい時代の移り変わりのスタート地点を生きたヒロイン・希沙は、さまざまな体験を得て、自分なりの人生を切り拓いていく。

『横浜開港絵巻 赤い崖の女』を読むと、

あの時代を生き抜いたであろう一人の女性の姿を通じて、当時の横浜が鮮やかに浮かび上がってくる。歴史のガイドブックとしても、手元に置いておきたい一冊だ。この本があれば横浜散策も、より趣深いものになるだろう。

## 次は横浜の歴史地図づくりに挑戦

ところで山崎さんの出身は京都。しかし幼少の頃から、横浜には強い憧れを抱いていたという。「はじめは横浜を訪れたのは、中学時代の修学旅行でした。当時から海外ミステリーを読みふけていた少女だったので、日本一ハイカラな街・横浜にはとっても興奮しましたね。そしていつか絶対ここに住もうと固く心に誓ったのです」。

今は横浜南区に住まいを置き、ママの生活を満喫している山崎さん。次なる横浜を舞台にした小説の構想を練っている。

そんな山崎さんが今取り組んでいるのが、横浜の歴史を読み解くガイドマップづくりだ。「実は横浜に住む人は、横浜の歴史にあまり興味を持っていないようなんですね。移り変わりが激しく、歴史を知るよすががあまり残っていないせいかもしれません。この地図本を持って街を歩くことで、150年の歴史を楽しく知っていただきたいです」。

発売は講談社から。9月刊行の予定だ。発売が待ち遠しい。▼

# 街の変遷を解読可能にした 「まちづくり地図情報」



いりえ よしひき(右)  
横浜市まちづくり調整局都市計画課  
担当係長 GIS 推進担当。  
いしぐろ とおる(左)  
横浜市まちづくり調整局 都市計画  
課。  
[http://www.city.yokohama.jp/  
me/machi/](http://www.city.yokohama.jp/me/machi/)

Photo by Yabe Shiho

## あなたの街の昭和を地図で遊ぶことが可能

都市は地図上に設計され、それに基づいて構築される。そのことを強く実感できるのが横浜市のまちづくり調整局 (<http://www.city.yokohama.jp/me/machi/>) が提供する地図情報だ。「まちづくり地図情報『イーマップ』」(<http://www.city.yokohama.jp/>)では、横浜市の都市計画基本図や用途地域、建築基準法等の制限内容(建築基準法道路種別等)など、まちづくりに関する地図情報が閲覧できる。拡大や縮小も自由。マウスを使って位置を移動することもできる。『イーマップ』は「行政地図情報提供システム」のひとつだが、『イーマップ』から切り替えられる地図の種類は、「よこはまの地価(固定資産税路線価)」、「だいちやんマップ(公共下水道台帳図情報)」などさまざま。

それらに加えて市区内の公園や自然林など緑化地域を表示する「環境 view」や、関東大震災級の地震が発生した場合に予想される防災お役立ち情報を集めた「わいわい防災マップ」など、都市構造を読み取るうとするその道のプロはもちろん、市民が見ても発想を刺激される楽しいコーナーだ。

まちづくり調整局の公開する地図の

なかでも秀逸なのは「横浜市三千分一地形図」(<http://www.city.yokohama.jp/me/machi/kitaku/cityplan/gis/3000map.html>)。無償で提供される「グーグルアース」と組み合わせ、現在の街と昭和初期や戦後の街を重ね合わせ、都市の変遷を読むことができる。

## WEB上に、市民に向けた地図情報を公開

『イーマップ』の前身は、1988年に運用が開始された都市計画情報提供システム「MAPPY」。地図(Map)と都市計画(Planning)。そして横浜(Yokohama)を掛け合わせた造語だ。当初は、設計事務所や開発会社、不動産会社など、事務上で行政地図が必要な人たちに向けた行政サービス・システムとして提供された。その後、インターネットの一般化が進むとともに、行政と市民が情報を共有化できるような地理情報システム(Geographic Information System = GIS)を目指すようになった。

そしてインターネット版の『イーマップ』が運用開始となったのは2002年のことだ。横浜市のGIS開発に当初から関わってきた石黒徹さんは語る。

「当初、GISは行政のツールとして発展してきました。しかし、これからはインターネットの時代。地図情報を行政から一方的に

流すのではなく、市民参加による地図づくりを可能にしていきたい」。

## 従来の行政マップとは違う新しい視点

「横浜市三千分一地形図」は、そんなGIS活用推進事業の中から生まれた。実施したのは同僚の入江佳久さん。横浜開港資料館や横浜都市発展記念館の協力を得て作成した。

「グーグルアース上に古地図を重ね合わせると、文字では伝わらない横浜の歴史が実感できるようになるんです」と、入江さんはいう。紙の地図では場所や空間を読み取ることは可能だったが、歴史や変遷など時間を読み取ることが難しかった。しかし、この仕掛けでは、それが可能となっている。地図が街を楽しく読み取るエンターテイメント・ツールとして進化しているのだ。市民散策や観光における利便性の提供という、これまで行政が提供してきた地図とは明らかに違う視点が追加されている。

GIS活用推進事業が現在目指しているのは、災害情報を蓄積・管理するモデル、生活に役立つ地図情報を市民に提供するモデル、市民が地域情報を投稿し、それを反映するなどの相互的な地図づくりをおして地域間の連携を支援するモデルの3つだ。

地図は読むだけのものではなく、参加して作る時代に突入しつつある。▼



かねひろ あきら  
1970年生まれ。東京芸術大学建築科大学院卒。モットーは、小物件から大プロジェクトまで、歴史と文化と人のつながりを大切に。施主、行政、地域市民、職人達と体当たりで力を合わせたモノづくり。一級建築士。有限会社 USC 街・空間計画代表取締役。http://www.u-s-c.jp/

# 洋館付き住宅から 横浜の都市デザインを 発想する

## 山下町の居留地遺跡保存活動に取り組む

昨年、新県民ホールNHK放送横浜局の建設予定地となっていた山下町旧県警跡地、わが国有数の大規模な居留地遺構が発掘され話題となった。幕末から明治初期にかけて、山下地区にあった外国人居留地の実態を偲させる遺構だったからだ。

街の成り立ちを読み解くことができる歴史資産だが建設計画をほごにすることは難しい。それでもなんとか保存はできないかと発足したのが、「山下居留地遺跡の価値を考える会」。その暫定事務局長の任に当たっているのが、有限会社USC街・空間計画の代表、兼弘彰さんだ。昨年末に、県主催で公開の見学会が実施されたのを皮切りに、専門家や市民等有志によって発足した同会で、不可能を可能にしようと頑張っている。「遺跡を歩くとその時代の風景やたずまいがリアルに感じられて、胸に迫るものがありましてね。なんとか一部でも保存できないかと具体的な保存プランを提案しました」。

提案の内容は、新しい建物の一部に遺構を活かしたプロムナードを設け、市民が回遊できるようにすること。県知事、県担当、都市再生機構や関連事業者と意見交換を行い、ようやく保存活用へ前向きに動き出そうとしているところだ。

## 改修すれば100年は保つ

兼弘さんのそんな活動を支えているのは、ともすれば見捨てられがちな建物の風情やその時代性に対する愛着だ。おおげさにいえば「都市デザインにおける歴史保存」。それが、同氏のテーマである。

横浜といえば、洋館。横浜の山手には今も古い洋館が立ち並び、当時の風情を今に残していることで知られている。一方で大正時代から昭和の初期にかけて、日本中に多くの「洋館付き住宅」が建てられた。「洋館付き住宅」とは、和風住宅の玄関脇に小さな洋館（洋間・洋室）が付いた建物。映画『となりのトトロ』にも描かれたあの建物だ。当時は文化住宅とも呼ばれ、一部の中・上流階級のシンボルとなっていた。そのたまたまはまさに大正、昭和初期の風情を色濃く残している。そんな洋館付き住宅も、今や老朽化が進み、空き屋同然となっているものも多い。それをなんとか修復・保存してよみがえらせようと「洋館付き住宅を考える会」を発足させ、その保存活動に取り組んできた。

「横浜には今も数多く残っている洋館付き住宅ですが、建てられてから80年は経過しています。改修工事をすれば、あと100年は十分に使い続けられるのに取り壊してしまうなんて残念です」。

## 造った人たちの思いが感じられる住宅

そんな思いから、年数回、関心を持つ人々を対象に洋館付き住宅を巡る街歩きを実施してきた。「毎回、全国から参加していただいている」そうだ。また、未来を託す子供たちを集めて建築の体験学習を開催したりもしている。地味だがそんな着実な活動が認められてか、2007年には横浜市都市デザイン室から「山手89・8番館」改修工事実施設計を依頼された。

「洋館付き住宅は近代住宅の始まりであり、まさに現代人のライフスタイルの原点。改修工事を実施したり、相談を受けたりして現場に足を運ぶと洋館付き住宅には建てた人、造った人たちの思いが感じられる。家そのものに強い力を感じる」。

日頃は、建築士として個人住宅や公共の建物の建築設計に携わる兼弘さんだが、洋館付き住宅から学ぶことは多く、大きな力を得ているようだ。「建築士という仕事から見ても、勉強になることが多い」という。

ともすれば激変するのが都市景観。そうした中であつて街を歩いていて洋館付き住宅に出会うとなぜかほっとする。横浜開港150年を迎える横浜で、兼弘さんのような若い建築家が修復・保全の仕事で大忙しになるような時代がくるようなことはないのだろうか。▼

# 古書店サイトから文化発信サイトへの大転換



この まこと  
1956年3月、鹿児島市生。早稲田  
大学政治経済学部在学中、横浜港から  
旧ソ連（現ロシア共和国）へロシア  
文学を巡る旅へ。大学卒業後、株  
式会社リコーに入社。1996年、紫  
式部の会社設立に参加し、2002年  
同社代表取締役就任。  
<http://sgenji.jp/>

Photo by Yabe Shiho

古書ネット流通の新たな地平を目指して

「スーパー源氏」(<http://sgenji.jp/>)とこ  
うサイトをご存知だろうか？

インターネット黎明期の1995年、横浜  
に誕生した、日本初の古書通信販売サイトで  
ある。立ち上げたのは、もともとリコーで情  
報関係の仕事に携わっていた河野真さんだ。

当時から、古書店は各店舗によって蔵書の  
品揃えが違った。だから、目的やテーマに  
よってそれぞれの専門店に行ったり、頼んだ  
りする必要があった。つまり、本を探すのは  
大変で、時間のかかる作業だった。

ITと深く関わっていた河野さんは、その  
本探しの不便さに注目した。そして、ネット  
やデータベースを活用して古書を検索で探せ  
るようになれば、研究者や読書好きの人に欲  
迎されるはずだと市場を読んで、サイトを立  
ち上げた。

当初は古書業界の古い体質や無理解などの  
壁にぶつかったが、インターネット普及期の  
1998年頃から急速に需要が高まり、ビジ  
ネスとしても成り立つ目算がたつた。

「長年探していた本がやっと見つかった。  
ありがたう」といった利用者からの反応も  
増えてきて、手応えを感じました」

とはいっても本業との並立は難しい。そこ  
で黒字化に見通しのたった2000年、意を

決して会社を辞めて独立した。

大手にはできない新サービスを開拓

しかしインターネットが本格的に普及する  
につれ、アマゾン、楽天、ライブドアなど大  
手が続々と参入してきた。企業規模からい  
えども太刀打ちできない。そこで河野さ  
んは「スーパー源氏」に加え、新しいサービ  
スを次々と開拓していった。

そのひとつが、家系図制作サービス「葵」  
(<http://www.kakeizukukuri.com/>)であ  
る。これは明治時代のご先祖様まで遡って家  
系図の巻物を作成し、桐箱に入れて届けるこ  
うなサービス。個人では不可能な調査を代行  
し、人気が高まっているという。

その他にも伝統工芸・美術品専門サイト  
「桐壺」(<http://kirisubo.jp/>)、インター  
ネット日本語学校案内(<http://jisguide.com/>)などさまざまなサービスを展開して  
いる。いずれも新規性はあるが、ニッチで大  
手が参入しにくいロングテール・ビジネスだ。  
つまり、市場は狭いが確実な顧客を見つけや  
すいジャンルである。

ポッドキャストで文化情報を発信

同様な発想で、本業の古書サービスにおい  
ても間口を拡げつつある。音楽CD、映像D  
VD、書画、肉筆原稿、楽譜などなど、ア

イテムを多方面に拡大した。その集大成が、  
2008年4月の大幅リニューアルだ。  
「スーパー源氏」を「本と文化の街」のサ  
イトとして位置つけて再構築した。

注目点は、ポッドキャストを活用し  
たネットラジオや、サイト上での動画番組配  
信だ。番組はもちろん、書や文化に関するも  
のである。「実は横浜や神奈川は、句碑や文  
学碑が多い地域なんですね。こうした文学的  
な歴史を探求するような番組をネットからど  
んどん配信していく予定です」。

スーパー源氏の加盟店も今や250店舗  
ゆくゆくは1000店舗までのばしたい、と  
目標を掲げる。

さらに現在利用が広がるブログやSNS  
を活用して、読書をテーマにしたコミュニ  
ティづくりにも挑戦するという。いわば、  
WEB2.0の読書文化発信サイトだ。

「活字離れがいわれて久しいですが、その実  
態は紙離れです。だから私たちは今の時代に  
ふさわしい読書環境を整えて、本を愛する人  
の要望にもっともって応えてきたいと思っ  
ています」。

河野さんにとって横浜は、大学生時代、大  
学から旧ソ連にロシア文学の旅に赴いた思  
いの地。その横浜にしつかり根を下ろし、  
河野さんは今日も新しい文化情報発信ビジネ  
スに挑戦を続けている。▼



ささき じゅん  
1954年生。横浜生まれの横浜育ち。和光大学文学部文学科卒業。1980年、幼少の頃から慣れ親しんでいた有隣堂に入社。書籍部門を経て2006年に出版部部長。現在横浜市神奈川区在住。妻と子供2人の4人家族。月刊『有隣』のURL：<http://www.yurindo.co.jp/yurin/back.html>

# 地元老舗書店の出版部だからこたわる、人・地域に根ざした出版活動

月刊『有隣』は創刊485号

ハマツ子ならだれでも知っている大型書店有隣堂。創業1909年(明治42)と長い歴史を持ち、書籍のほかにもさまざまな商品を抱えている。書店としては伊勢佐木町の本店をはじめ県内各地に店を構え、さらには、東京や千葉にも店舗網を拡げている。

そんな「地元の本屋さん」のもう一つの顔が、書店には珍しい出版部の存在だ。しかも最初の発行物は、1913年(大正2)というからその歴史は古い。1975年(昭和50)には正式に出版課としてスタートを切り、現在の出版部にいたっている。

その有隣堂出版部の活動は、大きくふたつに分けられる。ひとつは、1967年(昭和42)、お客様とのコミュニケーションを図る目的で創刊された月刊情報紙『有隣』の発行だ。その記事内容は、歴史、文化、経済、時事問題から自然科学までさまざまな専門家・識者を招聘しての座談会や、各界の一流執筆者によるエッセイ・論説、話題の本をテーマにしたインタビュー記事、そして新刊案内など。この『有隣』は、有隣堂各書店で無料配布されているほか、定期購読(年500円)も可能で、記事の一部はインターネットで読むこともできる。すでに485号(2008年4月現在)を数える歴史を重ねてきた月刊

紙である。読書会などの資料として使いたいなど、バックナンバーの問い合わせも多いという。「読み捨ての情報紙という扱いではなく、資料などとして活用いただけていることが嬉しいですね」そう語るのは、有隣堂勤務28年の出版部長・佐々木淳さん。

歴史・文化から自然科学までをカバ―

有隣堂出版部のもうひとつ大切な活動が、文字通りの書籍の出版である。これまで写真集、単行本など、神奈川の歴史・文化から自然科学にいたるまで、さまざまなテーマで書籍を発行してきた。たとえば明治初期に創刊された英字新聞「フアースト」に掲載された写真などを集めた『文明開花期の横浜・東京』を昨年出版した。これは、100年以上も前の横浜をはじめ、鎌倉や箱根などの様子を知る貴重な歴史的資料となっている。

また1976年(昭和51)からスタートした「有隣新書」も好評だ。こちらも歴史・文化や自然、時には現代的な諸問題も取り扱うシリーズとなっている。その数は現在65点を数える。なかにはいまだにロングセラーを続けている「相模のものふたち」(永井路子著)をはじめ、65点目の「横浜港の七不思議(象の鼻・大棧橋・新港埠頭)」(田中祥夫著)まで、埋もれた歴史や人物に焦点を当てた貴重な内容のものも多い。

「神奈川県は、鎌倉や横浜に代表されるように、地域や時代を越えた普遍的なテーマを多く抱えています。それだけに関心を寄せていただく方は多く、いわゆる郷土史というだけのもではないと思います。その意味でも、地域に根ざした出版物を発行する意義は大きいと感じています」。

これらの出版物は、有隣堂各書店でももちろん、全国の書店でも購入することができる。

創業100周年を控え、大型企画進行中

そもそも有隣堂の「有隣」とは、論語里仁篇にある「徳は孤ならず必ず隣有り(徳不孤必有隣)」という孔子の言葉が由来。まさに「徳は隣にある」ことを実践しつつ、地元の人と地域に根ざした出版物を刊行し続けている。その結果生まれた情報のネットワークは県内にとどまらず、貴重な発刊テーマはつねに企画の俎上に登り続けているという。

おりしも来年の2009年は、横浜開港150周年。市でも数々のイベントが予定されているが、実はその年は有隣堂創業100周年でもある。その記念すべき年を控えて有隣堂出版部でも現在大型企画が進行中とのこと。「100周年にふさわしい、話題性が大きく、地元の方々にも喜ばれるような出版を予定しています」。その全貌があきらかになる日を、期待を込めて待ちたい。▼

やがすり  
矢<sup>や</sup>緋<sup>が</sup>の<sup>す</sup>り  
エ<sup>の</sup>女<sup>の</sup>走<sup>り</sup>れる伊<sup>勢</sup>佐<sup>木</sup>町  
オ<sup>デ</sup>オン<sup>座</sup>より光<sup>は</sup>とどく

水原紫苑

写真 矢部志保

私の母は戦前の横浜に育った。通学には伊勢佐木町を通っていたという。オデオン座の映画も魅力的だっただろうが、生真面目な母は、覗いてみることもしなかつたらしい。まあ、女学生が学校帰りに映画を見たり、喫茶店に入ったりすれば、すなわち不良だった時代である。春の星座のようなオデオン座空、遠い宇宙の光が、少女の母に注がれる風景を夢想してみた。

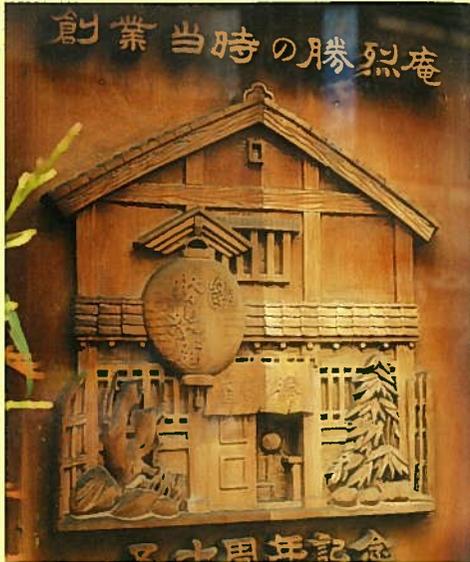


みずはら しおん  
歌人。1959年神奈川県生まれ。早稲田大学大学院修了。春日井建に師事し、以降歌集「ひあんか」「客人（まらうと）」「くわんおん（観音）」「いろせ」「あかるたへ」、著作「世阿弥の墓」「星の肉体」「京都うた物語」などを発表。現代歌人協会賞受賞、駿河梅花文学賞受賞、河野愛子賞受賞など多数受賞。

やべ しほ  
写真家。1974年生まれ。奈良県出身。同志社女子大学短期大学部日本語日文学科卒業。96年ドイツに渡り、日本語教師となる。帰国後、平地勲に師事し、独立。渡辺貞夫らミュージシャンを多く撮影している。



▲店内には棟方志功の作品がかけられている



▲入口にかがけられた創業時をしのぼせる木彫



創業昭和2年、変わらぬ味を守り続ける老舗。

# 勝烈庵

創業者は異色元企業経営者

横浜でトンカツといえばここ、といわれるほど有名な老舗店「勝烈庵」。1927年(昭2)、慶応大学出身、元企業経営者という異色の経歴を持つ小澤竹蔵氏が、中区真砂町において創業を果たす。当時から横浜の名店として多くの人々から人気を集めていたが、太平洋戦争によりやむなく休業。戦後、かつて経営に携わっていた若和田テイさんの並々ならぬ熱意と努力が実り、小澤氏の遠縁にあたる故・本多マサオ氏(前会長)により横浜駅西口名品街(現・相鉄ジョイナス)の地下において再興を遂げる。

1967年(昭42)には山手の丘に山手十番館を、1970年(昭45)には高

島嘉右衛門邸旧址に馬車道十番館を開館。その後も店舗や関連会社を着々と広げ、今や勝烈庵は平日は付近のサラリーマンや親子連れ、休日ともなれば外国からの観光客で賑わう横浜を代表する名店として多くの人々に愛されている。

素材と味への徹底的なこだわりを続けて

カツレットの味は、80年前の創業以来守り続けられている。

肉は厳選した豚肉のヒレ肉。パン粉は馬車道十番館で特別に調整し焼かれた食パンを使用し、耳を落として柔らかいところだけをパン粉に、油も独自に配合したものを使っている。さらに秘伝のソースは、新鮮な野菜と果物をふんだんに盛り込み、じっくりと煮込んで丸一日寝か

せる。もちろん防腐剤などの添加物はゼロ。その日のうちに使い切るので、毎日できたてが各店に配送されている。

こうしてできあがったカツレットは、衣はバリバリさつくりと香ばしく、なかの肉は溶けるほどに柔らかくジューシーだ。もうひとつ、勝烈庵の大きな特徴は、揚げカツが四角いこと。もともと丸い肉を独自の方法で四角くひらき串を刺し、揚げていく。これにより肉が柔らかくなり、食べやすくなるのだという。

メニューは、エビフライ、牡蠣フライなどさまざまあるが、一番の人気メニューはやはりかつれつ定食。ソースはやや甘口なので「たつぷりかける」のが、おいしくいただくコツだ。また持ち帰りのできるカツサンドも人気で、今や横浜土産としてかかせない存在となっている。

お店の壁には、棟方志功自筆の絵画が

古きよき時代のたたくまが残された落ち着いた雰囲気の本店の客席数は全160席。壁には故本多正道会長の知古であった板画家・棟方志功自筆の絵が数多くかけられている。「横浜八景」など、ここでしか見ることのできない棟方画伯の作品も多く、それだけでも横浜の貴重な文化遺産といえるだろう。棟方氏

本人も生前は頻りに勝烈庵を訪れ、かつれつ定食に舌鼓を打っていたという。80年の歴史を経て、「今ではお客様も従業員も、親子二代にわたって、という方もいらつしやいます」(営業部長 本多初穂さん)。それもまた、勝烈庵が長年にわたって人々に愛され続けてきた何よりの証しといえるだろう。

総本店は関内ホールやホテル街が近く、平日、休日ともに、いつも賑わっている。地元商店街のイベントなどにはかさず路上に店を出し、人だかりは絶えない。ちなみに毎月20日は「感謝デー」と銘打って、全店、全商品、すべて1割引。都合がつけば、ぜひお出かけになってはいかがだろうか。

ところで勝烈庵の命名の由来は、「烈しく勝」。幾多の困難を乗り越え、勝烈庵は、料理への妥協のないこだわりを貫き、今や横浜を代表する名店として、今日の成功を勝ち取った。しかしその根底には、これまで多くのお客様と従業員に支えられ続けてきたという歴史の重みが、しっかりと根付いているのである。▼

株式会社 勝烈庵 <http://www.katsuryusan.co.jp/>  
馬車道総本店 〒233-10014 横浜市中央区  
馬車道5-1-5082 営業時間 午前11時~午後9時  
(年中無休) 電話 045-6881-4411

# コーヒー鑑定士修行で磨いた 色と香りと味の評価軸 丸山和俊さん

Who's Who In Yokohama



まるやま かずとし  
1959年8月、東京都出身。日本初のセルフ式コーヒーショップ「ドトールコーヒー」の普及に努めたあと、1999年3月に円満退社。約1年間の充電期間を経て2000年1月に株式会社インターフードを設立、代表取締役社長に就任。NHK出版「男の食彩」のコーヒーの焙煎講師や企業のフードビジネス・コンサルタントとして活躍するかわら、2004年に長野県と提携し、有機農場でトマトソースやこだわり麺の加工販売を開始。2005年には、料理の鉄人100人が集結したザ・スーパーシェフの設立に発起人として参画。有機加工品など、こだわり食品の開発製造のバイオニアとして現在活躍中。  
〒231-0021 横浜市中区日本大通7  
日本大通7ビル  
電話：045-210-9158

## 好奇心が生んだ明治の味の複製版

当たり前のように思っている日常の味覚も、社会や市場の変化とともに日々ダイナミックに変化していく。ふと気がついた時には、最初に作ったものとはまるで違っていたという例はあまたある。

ケチャップも同様だ。明治から一世紀半も経ってみればだれも、その原点の味など知らない。いったいどんな味だったのだろう、食材は何だったのだろうと知的好奇心を刺激される人が出てきても不思議はない。

トマトソース製造やパスタ専門店「パスタフロッラー」を経営する株式会社インターフードの代表取締役、丸山和俊さんの場合は、まさにそれだった。たまたま横浜市発行の季刊誌「横濱」に掲載されたケチャップ事始めの記事に刺激されて、その味を追求しなくなった。そして生まれたのが明治の味の複製版「清水屋ケチャップ」だ。香辛料を含めて当時の素材にこだわって苦勞のすえにようやく明治の味にたどりついた。

結果は上々。2007年10月から、横浜市内限定で毎月2000本を販売し、売り切った。その勢いを借りて、今年も横浜でトマトの畑を使って第2弾の販売を目指す。

味覚をマーケティングの対象としてきた食のプロをかき立てたのは、「なじみのない

味覚に挑戦した明治の人たちの開拓者精神」ものづくりから始めて市場に受け入れられるに至るまで、明治の市場開拓者は、ひとつひとつの課題を解決していったに違いない。「原点にはすべてがある。いつまでも作り続けていたい僕としては、チャレンジ精神を含めてそれにこだわりたい」という。

## チャレンジ精神を支える独特の味覚評価軸

幼い頃から料理人に憧れ、18歳で料理修行を始めた丸山氏はふとしたきっかけで「ドトールコーヒー」に入社する。まだ、セルフ式コーヒーショップが当たり前になる前の話だ。そこでメニュー開発から焙煎工場の設立までを担当することになった同氏は、さまざまなレベルでの食のマーケティングの現実を学ぶ。

なかでも重要なのは、ブラジル政府認定クラシフィカドール（コーヒー鑑定士）を取得したこと。味覚を計量的に表現するのはなかなか難しいが、この資格のおかげで丸山流とでもいべき独特の味覚評価軸を掴んだ。

「素材を微粉にして水に溶いた時の色と味、それをスプーンで霧状になるようにすすって鼻から出した時の香りの記憶で、何がどれくらいの割合でブレンドされているかわかる」に至ったという。1日に200杯前後のコーヒーを飲んでからだはおかしくなったが、そ

のおかげで休得した味の評価手法が、ドトールコーヒーを退社したあとのビジネスやコンサルティングに役立った。

## 理想は日本のものを日本で食べること

たとえば、無農薬・無添加にこだわったパスタ屋「パスタフロッラー」の場合、味覚と香りの評価軸は小麦粉の香りやそれを練り上げる水の質を評価する際に役立った。

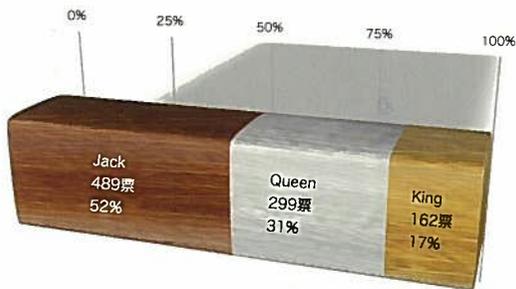
評価の結果、食材の微妙な組み合わせとして選ばれたのは製粉したてのデュラム小麦のセモリナメッシュと、北アルプスのおいしい水。「最良質な中心部分だけを粗挽き、有機塩と水を加え3日間かけてゆつくりと天然熟成する」のが丸山流だ。コーヒー鑑定で磨かれた評価軸は食材選択に始まり仕上げにいたるまでさまざまな場面で役立っている。

そんな丸山社長が理想の食環境は、「日本のものを日本で食べること。うまいものは旅をしないのです。できるだけうまくて安いものをオーガニックで提供できるように環境を作りたい。」

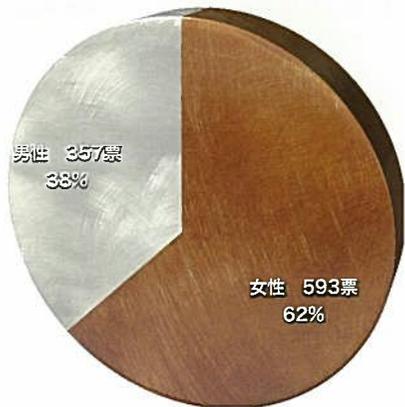
食を取り巻く今日の課題はたくさんある。食の安全、食の自給率回復、地産地消、あるいは無添加フード指向など、すべて当たり前であって欲しいことだ。丸山さんの挑戦が成功して、食の課題への取り組みがチャレンジジとは見えない時代になって欲しいものだ。▼

### 三塔人気投票順位

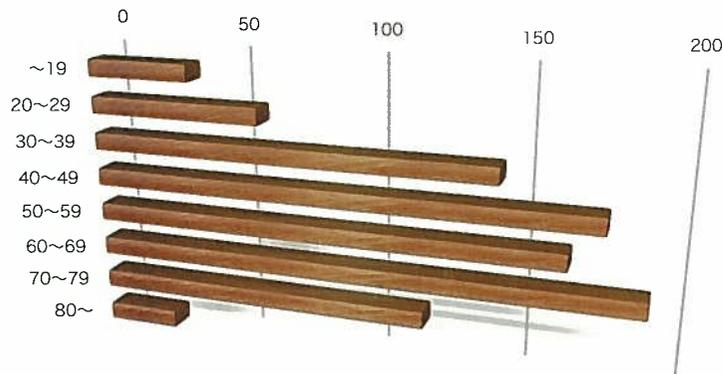
応募総数 950



### 三塔人気投票男女比率



### 三塔人気投票世代別構成



\*1 23ページで紹介しています。  
\*2 裏表紙にご案内があります。

の応募は少数でした。少子高齢化という社会構造を反映した結果と考えられますが、公募媒体の性格も影響していると思われます。公募にあたっては公募情報誌を利用しましたので、全国から応募していただくことができました。また、新聞の地方版に公募の記事が載ったため、神奈川県からの応募が多数ありました。結果的には、公募情報誌を見て応募した方の数を、新聞を見て応募した方の数が上回りました。公募情報誌の読者層が比較的高いことと、若年層は新聞をあまり読まな

い傾向があることを考えると、若年層の応募が少なかったのは、公募媒体の性格にも因るものだと思います。ただ、若い方たちの三塔の認知度が低いのは事実だと思えます。若者にとって横浜のランドマークは、三塔やマリントワーではなく、文字通り、横浜ランドマークタワーでしょう。そうした現実を踏まえて、三塔やマリントワーなどの歴史的・伝統的なシンボルを若年層に認知してもらえようような企画や街づくりが求められていると思います。

# 結果発表

## 横浜三塔物語 あなたが選ぶ、お気に入りの一塔 「最も訪れてみたい塔は？」

### 横浜三塔とは

横浜市開港記念会館（愛称ジャック）、横浜税関（愛称クイーン）、神奈川県庁本庁舎（愛称キング）を総じて横浜三塔と呼びます。洋風近代建築である三塔は、先進的なイメージを持つ横浜のエキゾチズムを象徴する存在です。

横浜信用金庫（横浜ジェリービーンズ倶楽部）では、2008年1月～2月末日までの2か月間にわたって、横浜三塔のうち「最も訪れてみたい塔」を全国から募集しました。

### 「最も訪れてみたい塔」1位はジャック

応募総数は950票で、岐阜県を除く全部道府県から応募がありました。第1位は横浜市開港記念会館（ジャック）で、得票数489票（得票率52%）でした。ほぼすべての年齢層で男女ともに人気が集まり、過半数

を占める結果となりました。第2位は横浜税関（クイーン）で得票数299票（得票率31%）、神奈川県庁本庁舎（愛称キング）は得票数162票（得票率17%）で第3位という結果になりました。

厚・荘厳で一番好き」（70代男性）など、その力強さを支持する声が多くありました。

### 横浜市民の女性の支持を集めたクイーン

ジャックに人気が集まった理由はさまざまですが、「レンガ造りの時計台がきれい」（60代男性）、「ステンドグラスがステキ」（30代女性）、「塔に登ってみたい」（40代男性）といったコメントが目立ちました。クイーンの横浜税関やキングの神奈川県庁本庁舎と違って、市民が利用できるホールを持つジャックは、「ピアノの発表会があった」（30代女性）、「コンサートを聴きに行った」（60代男性）などの経験や思い出が得票につながったようです。

### 最多応募世代は60代

応募者を世代別に見ると最多世代は60代で、次いで40代、50代が多く、20代以下の若年層

第2位のクイーンには「イスラムのモスクかと思ったら税関で驚いた」（市外在住30代女性）など、グリーンドームに魅せられたという意見が多く、第3位のキングは「重

世代・性別を超えて圧倒的な人気を集めたジャックですが、横浜市在住の女性応募者（281票）の投票結果を分析してみると、クイーンが125票を獲得し、ジャックの120票を僅かながら上回りました。「クイーンの優雅なたたずまいはまさに女王の愛称にふさわしい」（50代女性）や「朝や夕暮れ時など時間帯によって表情を変える」（60代女性）などのコメントがあり、実物を見る機会がある横浜市民の女性には、クイーンのもので肩代おやかな風情が支持されているようです。



ビストルモンキー (ス)

**横浜三塔物語〜ジエリービーンズコンサート〜**  
**横浜市開港記念会館**  
 キング(神奈川県庁)、クイーン(横浜税関)、ジャック(横浜市開港記念会館)の横浜の三塔を一望できる場所をまわると願いがかなうという都市伝説があります。これが「横浜三塔物語」です。  
 横浜ジェリービーンズ倶楽部では、横浜市開港記念会館で2008年3月9日(日)にジェリービーンズコンサートを開催しました。横浜を盛り上げようと続けているこの「ジェリービーンズコンサート」



横浜信用金庫では、横浜のマーケティングを实践する「横浜ジェリービーンズ倶楽部」事業を展開しています。同倶楽部は「横浜の価値を高める各種の活動」を行うことを主目的としており、横浜観光プロモーションフォーラムによる認定事業となっています。ここでは、最近実施された同事業についてご紹介いたします。

ト」も今回で18回目になります。今回は「横浜三塔の日」(3月10日)を記念して、三塔にちなんで3バンドを迎えて行ったコンサートです。「横浜のクイーン I R a b b i t s です!」今日はジャック役で呼んでいただきました。N. U.です。よろしく!「ビストルモンキー」の俺達はキングだ!盛り上がっていきましょう!...。どのバンドも三塔とからめて会場を盛り上げてくれました。

**「北の恵みシウマイ」**  
**崎陽軒100周年企画**

「横浜ルネサンス」10号で紹介した



シウマイの崎陽軒さんが、4月に創業100周年を迎えられました。同社では次の100年に向けて「横浜のおいしさを削りつづける」という新たな理念を掲げ「真に優れた「ローカルブランド」を目指します」というステキな宣言をしました。100周年キャンペーンとして実施される各種の企画のひとつに、記念商品「北の恵みシウマイ」があります。干帆立貝柱や枝豆、コーン、いかなど北海道産の原材料にこだわった製品です。大粒タイプ6粒入りで、価格は税込650円。5月31日までの期間限定商品です。  
 株式会社崎陽軒 URL: <http://www.kyokoken.com/>

**「横浜ルネサンス」が信用金庫PRコンクールで最優秀賞受賞**

「横浜ルネサンス」が第27回信用金庫PRコンクール(主催:全国信保懇話会)のPR冊子部門で、最優秀賞の富国生命社長賞を受賞しました。同コンクールには181信用金庫・関係団体から合計で649作品の応募がありました。PR冊子部門には51信用金庫、75作品の応募があり、「横浜ルネサンス」はこの中から最優秀賞に選ばれました。

**横浜ルネサンス No.11**

2008年5月10日発行  
 発行 横浜信用金庫  
 〒231-8466 横浜市中区尾上町2-16-1  
 Tel:045-651-1451(代) Fax:045-651-2303  
 http://www.yokoshin.co.jp  
 編集 横浜信用金庫総合企画部  
 〈横浜ジェリービーンズ倶楽部〉  
 http://www.yokoshin.co.jp/jbeans.html  
 E-mail:jbeans@yokoshin.co.jp  
 制作・デザイン PortSide Station Co., Ltd.

© 横浜信用金庫 Printed in Japan 本誌記事の無断転載・複写を禁じます  
 本誌に関するお問い合わせは、横浜信用金庫総合企画部:045-651-1451(代)まで

**横浜観光プロモーションフォーラム**

横浜の観光・コンベンションに携わる約180の企業・団体・市民事業所からなる組織で、横浜への来訪者を増やすことを目的として活動しています。「横浜ルネサンス」を発行する「横浜ジェリービーンズ倶楽部」事業は、同フォーラムの認定事業となっています。



*How To Taste Musics In Yokohama.*

**横浜の聴き方**

第4回

**「夜が明けたら」**

浅川マキは寺山修司に見い出されて、1969年「夜が明けたら」でデビューした。地味な曲なのだが、よくラジオでかかっていた。ウッドベースのイントロを聞いて、「また、この曲か」と思った記憶がある。「アングラ」という言葉とともに新宿が独特の魅力を放っていた時期である。彼女は、理屈っぽい当時の大学生の強い支持を得ていたという印象がある(昔の大学生は理屈っぽかったのだ)。



「この町を出て行くんだよ」と、彼は言った。(中略)  
 「昔、そんな歌があったぜ」と、私は隣の大男にいった。  
 「夜が明けたら、いちばん早い汽車に乗って、この

町を出て行くってのさ」  
 「あの女が歌った町は新宿だ。定置網にひっかかった鱈みたいな百姓女が新宿のドブを出て行くって歌だ。——一緒にしないでくれ」  
 大男は不快そうに唇を曲げた。

このエッセイは「複雑な彼女と単純な場所」(新潮文庫、1990)に収められている。最近読んで、(石川県出身の)浅川マキに対するこの痛烈な批判にちよつと驚いた。彼女はあまり批判されたことがないと思う。矢作俊彦は1950年、横浜生まれ。この本には「私たちは、一般的に中区以外の場所を横浜とは呼んでいなかった」というフレーズなど、浜っ子の強烈なプライドが満載されている。このエッセイにも大男が中区から磯子区へ転居するというオチがみついている。

【追記】小松左京に「夜が明けたら」という短編がある。浅川マキとはまったく関係がないが、暗いムードは共通している。良い短編である。同題のハルキ文庫で読める。▼(中島久)

# JELLY BEANS

STAR FESTIVAL

織姫たちの競演

出演

I-RabBits

Capoek

LiLi

CHURU-CHUW

# 七夕 CONCERT

ジェリービーンズコンサートin三溪園

主催：横浜信用金庫<横浜ジェリービーンズ倶楽部>

2008.07.05[土] 13:00開演 三溪園



コンサート当日、本冊子をお持ち頂くと、  
三溪園の**入園料**が**割引**になります。

通常

大人(中学生以上)500円

こども(小学生)200円

割引

400円

100円

※コンサート当日限り有効です。